
提督立志伝 真・第一章 ～西方動乱編～

ふじぱん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

提督立志伝 真・第一章 〱西方動乱編〱

【Nコード】

N0780P

【作者名】

ふじばん

【あらすじ】

提督立志伝第一章模倣編、第二章赤鳥編、ともに「で、表題の提督はどこだよ」と意見が大量に寄せられ、まさにその通りとしか言えない現状。さすがに模倣、赤鳥は熟考した結果、本編にする必要がないとして、第三章として予定していた本編を前だおして真・第一章として公開することに相成りました。どうもご迷惑をお掛け致します。

1話 提督と司令（前書き）

旧第二章（番外二章）赤鳥編の現時点未公開の展開が一部ぼそつと記載されていますが赤鳥編はそもそも過去話なうえ、旧第一章模倣編終盤でそれに類すること書いているので問題ないかなと思いますので宜しうさせていただきます。赤鳥編は赤鳥編として執筆しますので宜しくお願いします。

1話 提督と司令

あらずじ……。

ファラス水軍中夫、リーズはウエンドス王国海軍と会戦し、旗艦を沈めるも自艦も沈み相討ちという形で、ウエンドス王国の捕虜となる。その後、ファラス王国はウエンドス王国に吸収合併され、事実上故国が消滅する。

その後ウエンドス国王フメレオンに、旗艦を沈めたことを高く評価されファラスへの仕官を求められ、それに合意する。

その後、ウエンドス国内で現王フメレオンを廃し、弟のフメロンを王位につかせようとする貴族が反乱を企てるものの、外様に位置するリーズを含めた現王派がそれを察知し、未然に防ぐ。

その時の働きにより、リーズは客将の身分からウエンドス海軍提督に昇格する。

王弟派に荷担した貴族は次々と処分され、一掃されていく。すべて順調、順風蔓延に見えたが、それは大きな動乱の序章であった。

王、フメレオンは対外的に決して清廉な王ではなかった。

そもそも、前王である父から王位を篡奪して王位についており、今回は実の弟を廃しており、非人道的として批判を浴びていた。

さらにファラスへの侵攻、そして吸収合併で世論は完全に敵に回る。

国際的孤立のなか、リーズはフメレオン王に現状打開策として東の大国ヴィンセント帝国と軍事同盟の締結を進言。それを実行するため、使者としてフメレオンの妹、サレアをリーズと共に帝都に派遣。リーズは利害を説き、軍事同盟締結。

東方の憂いがなくなったウエンドス王国は西方の国家、ポシューマス、リグウェイ、ライジングに侵攻を開始する。

一方、王宮では何者かが暗躍を開始し出した。

リーズの元に、海軍総督なる上官を名乗る男が現れる。

その男の登場により、リーズはウェンデス海軍の総指揮権を剥奪され、第一艦隊提督という立場に降格する。

釈然としない感情を他所に、王命に従うリーズ。

また、時を同じくリーズ独自の判断でつけていた王の警護から連絡が途絶え、王の様子に違和感を覚えるリーズ。

なにか、例えるなら風が逆風を吹き始めた。

そんな予感が、リーズの中で警告しだした。

（以上序章）

同盟国であるヴィンセント帝国からの援軍要請を受けていたリーズ率いる海軍はヴィンセント軍と共に北伐の準備を行っていた。

そのとき、ポシューマス、リグウェイ、ライジングの西方諸国を攻略中の陸軍が予想外の苦戦をしているという報がウェンデス本国に届けられ、陸軍援軍として援軍派兵中の全軍が出陣を命じられる。今、ヴィンセント帝国の国交をないがしろにするわけにもいかず、かといって王命。リーズは苦肉の策として艦隊を二つにわけ主力艦隊をヴィンセントに残し、残る艦隊で救援に向かう方向で調整する。

また西方諸国はいずれも内陸国。海軍の主役である艦隊の出番は皆無に等しく、海軍の兵は一部例外を除き、軒並み陸戦の経験皆無だった。

このまま援軍に行ったところでただの足手まといにしかない。そこで現地採用という形で金套、銀蝶という陸戦指揮官を登用する。

準備を整え、西方諸国攻略軍への援軍に急ぐリーズのもとにある

情報が届けられた。

ポシューマス軍に赤鳥の英雄と呼ばれる男がおり、彼が指揮する軍に友軍が苦戦を強いられている、と。

赤鳥の英雄の名はクラブ。

リーズ、実の弟だった……。

（番外一章 模倣編最終話）

「リーズ提督！」

ウエンドス西方方面軍本営でリーズらを向かえるのは陸軍司令、車児仙。

「やあ車司令、久しぶり。 苦戦しているんだって？」

「ははは、恥ずかしながらね。 本当は陸軍と空軍だけで対処したかったんだけど」

「あんまり戦況は芳しくないって聞いたけど」

「まあ、恥ずかしながら内部分裂ってやつが原因だね。 言い訳のしようがないよ」

「内部分裂？」

「ゼロって覚えているかい？」

「ゼロ？ …… ああ、科学省推薦の彼？」

王弟派を廃し、リーズが提督に任命された爵位授与の日、見慣れ

ぬ青年がウェンデス軍の主力ともいえる機甲軍総帥に抜擢された。
まあ、その場ではリースも彼も同様の抜擢人事だったのでリースは特に何の感想も持たなかったのだが。

「そう、その彼」

「彼がどうしたんだ？」

「うん。それも含めてこれまでの戦況を話すよ。ちょっと長い話になるから座って話そうか」

リースと車兎仙は席につく。

「何から話したものかな」

「最初から今日までを。ボクは本国じゃなくてヴィンセントにいたから全くと言っていいほど西方方面軍の情報は入ってなかったんだ」

「ヴィンセント？ 何しに？」

「ヴィンセントから北伐するので援軍を要請され、その準備のためボクら海軍はヴィンセントに出向していた」

「ヴィンセントの北伐ってことは、目標はユハリーン王国か」

「うん、ユハリーンへの侵攻作戦だな」

「結果はどうなったの？」

話がいきなりヴィンセントの北伐について切り替わっている。

車児仙という男は飄々としているが、意味もなく話題を変えたりする男じゃない。　なにか意味のあつての質問だ。

「結果も何も北伐開始前にこっちの援軍で呼び戻された」

「え……、待つて待つて。　じゃあ、援軍要請で援軍に行つときながら引き返してきたつて事？」

「王命である以上、仕方ないだろ。　命令は全軍だったが、さすがにそんなことしたらヴィンセントは同盟違反でカンカンに怒つて同盟破棄とかになりかねないんで提督権限を駆使して主力艦隊は向こうに置いてきたけど」

「あちゃあ、まさか海軍がそんなことになつてるとは……」

車児仙は頭を抱え、項垂れる。

「あのユハリーンに今攻め込もうとするヴィンセントも軽率だけど、リース提督も軽率だよ……」

「え？」

「確かに単純兵力はヴィンセントの方が遙か10倍は勝っているよ。けどユハリーンは今や人材の宝庫って言われるくらい優秀な連中が仕官してる。　ヴィンセントは火薬のつまった壺のなかに松明をもつて攻め込もうとしているようなもんだ」

「いくらなんでもそれは誇張では？」

「何言ってるの、リーズ提督。まさか君まで彼の国の軍師の容姿に騙されている訳じゃないだろうね？」

車児仙が最も警戒しているユハリーン王国の軍師、シュー＝オオサカ。

若干10歳の若すぎる幼年軍師である。

「あの人材の宝庫の中で軍師を張る男だよ？　それがあの若さで抜擢される以上然るべき意味はある。子供だからって気を抜いているんじゃないだろうね？」

車児仙の指摘にリーズの顔は青くなる。

実際、年端もいかぬ子供が軍師という事実を軽視していた。

「だから私は海軍に援軍を求めるのは反対だったのに、ゼロめどこまで世情を読めないやつだ」

「ん？　援軍は車司令が求めたんじゃないのか？」

「私が？　まさか。私は潔く敗軍の楔を受けるつもりでいたよ。海軍援軍の話なんかゼロが王都に求めたあとに知ったにすぎない。それを許可する陛下も陛下だ、あの思慮深い陛下らしくもない」

「……そうか、そっぴや車司令は知らないんだったな」

「知らない？」

「陛下は変わられた」

「変わられた？　どういう事??」

「ハッキリとは判らないんだが、あるファクターを最後に陛下の性格が急変した」

「……どういうことか、こつちも説明してもらうしかないね」

リーズは車児仙に語った。

新白衆のつぐみをリーズの独断で警護役として配置していたこと。そのつぐみから連絡がとれなくなった事。

海軍総督という役職の男が現れたこと。

そして陛下の生気のない眼差しと、今までの陛下と見比べると覇気がなくなったこと。

そして、リーズお抱えの忍び衆、新白衆ですら科学省の事を調査できないこと。

「リーズ提督は科学省がこの件に絡んでいると睨んでいるわけか」

「まだ確証がない。それにボクはいつちゃんだが、この国の立ち位置は外様。主だった仲間はみんなこつち（西方方面軍）にいるだろ。本国に残ってるのは科学省の連中とボクだけ。完全に孤立無援に等しい」

「なるほど。つまり北伐の件は完全に容量不足の失態か。そんな状況じゃ、仕方ないとは言えないなあ」

「容量不足？」

「陛下の急変、いや連中の暗躍はさすがにリーズ提督みたく柔軟な思考の人でも一人で処理できるわけがないだろ。そもそも一人で国営を回そうとしているもん……。あ……。そういうことか。」

ボクも連中にはめられた一人ということだね」

車児仙が頭を抱える。

「聞くけど、ヴィンセントの北伐の提案って誰が起てた？」

「え？ いや、さすがにそれは知らない。ヴィンセントの誰かだ
と思うけど」

「ちなみにさ、この西攻めの草案はウルフレッド科学省長官なんだ
よね」

「え」

「それを把握したのがすでに西方諸国との開戦後だね。科学省は
何を考えているのか私は当時理解できなかったけど、提督の話で合
点がいった。この戦いは主だった陛下の側近を身边から一時的に
排除するため。それに提督が提督に就任したとき確かにボクも
適任かと思っていたけど、こうも考えられないかい？ 君は外から
来たばかりの陛下派の海軍仕官。まだこの国には浅い故に陛下の
変化に違和感は持つかもしれないけど深く疑わないだろう、と」

「……………」

「ところが提督の私兵、新白衆が陛下の警護を密かにしていること
を知らない連中が陛下を意のままに操ろうと陛下を襲撃したら新白
衆が出てきた。それで連中、提督の事を甘く見ていたことを悟っ
たんだろうね。だから総督なる男が急遽でてきたわけだ」

車児仙は科学省といわず連中という。

確証がない以上、そう表現するしかない。

もし敵が別において我々が科学省を疑うように仕向けている可能性もあるのだ。さすがウェンデスの名参謀、車児仙。

リーズにはない見地でモノの見方をする男だ。リーズだとこの時点で科学省を黒と決めつけていただろう。

「で、その後提督は北伐の援軍にこっちの援軍と二転三転。それは提督を陛下の近辺から排除したいっていう思惑が絡んでるみたいだ」

「なるほど、さすが車司令。陛下の信任第一位だけはある洞察力だ」

「お褒めに預かり光栄の至り。まあ、すべて提督と私の話を統合した末に出た憶測なんだけどね」

「憶測でも大したもんだ。正直、ボク一人じゃ煮詰まっていたところだ」

「となると」

「さっさと済ませて帰るに越したことはないな」

二人は頷き合う。

「じゃあ、話を戻そうか。んじゃ、最初から今日までの西の戦況は……」

車児仙は語りだした。

開戦当初は、ポシューマス軍を圧倒的に蹴散らし、王都まで迫っ

たこと。

ポシューマス軍が壊滅した軍を建て直すため王立ポシューマス学園の学生を学徒動員したこと。

その中の学生に問題となつてゐる赤鳥の英雄がおり、指揮権を得た赤鳥の英雄が獅子奮迅の活躍で機甲軍、空軍を打ち破つたこと。

その戦果をもとにライジング軍、リグウェイ軍を自軍に引き込み、あなどれない勢力になつたこと。

陸軍を含めた3軍がポシューマス連合軍と会戦し、ゼロ率いる機甲軍が挑発に乗り一敗地まみれそれからなしくずしに敗北したこと。占領した地区を次々奪回されてしまったこと。

ゼロが独断で本国に援軍を求めたこと。

「だいぶはしよつたけどだいたいこんなところかな」

「なんだ、そりゃ。ゼロつてやつ、指揮官向きではないね」

「まあ、そうだね。端からみているとただ本能のまま指揮しているようにしか見えなかった。そんな感じで勝手に動くもんだから統制はとれるわけなくスタボロさ」

「凡属な将が相手ならそれでもいいけど、一度自身が負けた将にその全く変化のない戦法だと戦う前から敗けが決定しているのと同じじゃないか」

「頭の痛いところなんだよね」

「そういえば総指揮官はゼロとかいうやつだったね。なんで指揮権を取り上げないんだ？」

「それは内部崩壊しろつてことかい？」

「内部分裂している今、一度崩壊した方がいい」

「簡単に言うね。 平時ならそれでいいけど今は作戦行動中。 そんなことしたら敵につけこまれるよ」

「すでに敗色濃厚だろ？ このままじゃ確実に負ける」

「じゃあ、機甲軍なしであのポシューマス連合に勝つ見込みがある
とでも？」

「……わかった、なら海軍がとるべき道はひとつ。 ゼロの指揮管
内には入らない」

「なに言ってる？」

「命令では援軍に行けのみ。 ゼロの指揮管内に入れとは言われて
いない」

「すごい屁理屈。 そんなのが戦後に通るとでも？」

「命令違反、独自行動には自称するのもなんだけど定評があるんで
ね」

「やな定評なこと」

「ま、海軍に任せとけて」

「陸戦で海軍にそんなこと言われたら陸軍の名折れなんだけど」

車児仙は笑いながらそう言った。

「権謀術数や総合的調整では車司令に勝てるとは思わないけど戦場で勝てなきゃ生粋軍人じゃないでしょ？」

「違います」

「ま、ボクらが動いたあとの判断は車司令に任せますよ。願わくば、とつととゼロの解任を迫ってください。じゃ、ボクらはボくらで動きますんで、宜しく」

第2話 提督と赤鳥の英雄

ウェンデス海軍本営……。

「到着早々でなんだが、海軍はすぐ出陣する」

リーズは海軍の指揮官を集めてそう宣言した。

「神速は兵を尊ぶ、ですか。 大胆な策ですね」

金套はにこやかな顔で言った。

「ああ、不幸中の幸いというかウェンデス3軍は壊滅的な敗戦直後。まさかこのタイミングで攻勢に出るとは思わないだろう。そこでさっそく金と銀にはひとつ大暴れしてもらいたい」

「上杉武士団、いつでも臨戦可能だ、今すぐにも出陣できるぞ」

「銀蝶……。 遠慮はいらない。 爆矢、火炎槍惜しむことなく使ってくれ」

「いいのか？ むざむざこっちの手の内見せても？」

「こっちに新白衆がいるように向こうにも新白衆がいる。 もはや隠し合いは通用しないと考えて良い」

「向こうにも新白衆が？」

「私の妹が、赤鳥の英雄の陣営にいます」

多恵がそう言った。

「妹の名前は千冬。我が妹ながら諜報、戦闘ともに新白衆のなかでは上位に位置します。それに加え、別の忍び衆が千冬に付き従っています。諜報戦ではまず五分の戦いになると予想しています」

「ついでに言うなら赤鳥の英雄とかいう奴は、ボクの弟のようだ。よって奇襲による電撃戦はヤツの耳にボクら海軍がポシューマスに入ったと耳にする前の今しかない。叩けるうちに叩く」

「提督の弟って、クラブ君のことですか。赤鳥の英雄の異名、合点が行きました」

「金套と銀蝶はクラブと知古があつたな。知り合い相手に刃物を向けるのは心苦しいかもしれんが、頼りにしている」

「まあ、いきなりクラブ君の本隊を叩くなんて言わないでしょ、提督」

「残念だけど、攻撃目標はクラブの本隊だ。雑魚には目をくれず本隊を潰しておけばこの戦争の主導権は我々ウェンデスに戻る」

「確認します、提督。そして多恵さん。クラブ君と千冬お嬢ちゃんと会敵した際、殺すつもりで戦わないとこっちがやばい。それでも問題はありませんか？」

「殺せるもんなら殺してくれ。ヤツは追い詰めれば追い詰めるほど手が負えなくなる。我が弟ながら敵に回すと厄介な奴だよ」

「できれば千冬は殺してほしくありませんけど、私が提督に全てを賭けているように千冬はクラブくんに全てを賭けています。歩く道が違ふ以上、私が覚悟を決めているようにあの子も覚悟を決めているはずです」

「……了解」

「あと、敵主要武将のなかで最も注意が必要なのは酒木原ひじり。こいつによって機甲師団は壊滅したらしい。もし戦場に現れたら真っ先に攻撃対象だ」

「よく、存じてますよ。私と銀みたく、クラブくんと那双壁は容易く破れるものじゃないことくらい」

「さて、他に質問はないようだな。では、作戦について……」

リーズは地図を開き、一同に作戦を説明する。

「……………大胆な。通用しますかね、クラブのやつに」

「銀蝶の疑問ももつともだけど、通用するさ。向こうがこっちの手の内を分かっているようにこっちもヤツの手の内を知っている。今現在におけるアドバンテージはこっちが握っているようなものだ」

一方、ポシューマス軍前線基地シュレイブ城塞。

「パパ、寝ないんですか？」

パパと呼ばれた青年は、目の前の少女の頭を撫でた。

青年の年齢と目の前の少女の年齢は同じくらいで親子というには無理のある年だが、目の前の少女は純粋に青年を親として慕っている表情でニコニコと微笑む。

「なんだか嫌な予感がしてね」

「それはただの杞憂じゃよ。何をそんなに警戒しておるのじゃ、主殿」

アクビをしながら先程の少女と同じ年くらいの少女がやってきた。しゃべり方がやけに老けている。黙ってれば美少女の部類に入るであろうに。

「なんだろうね、決まってやな事が起こる前はこんな感覚なんだよ」

「大丈夫です。マスターの身边は私が警護致しますから、ゆっくりお休みください」

大きな剣を携えた先程の少女たちと同年齢くらいの少女が青年を安心させようと微笑む。

「俺は大丈夫だから、パイもカイもモモもゆっくり休みな。今日は只でさえ忙しかったんだから」

今日の昼、彼らはウェンデス機甲師団と3度目の会戦を行っており、機甲師団を完膚なきまで叩きのめしたばかりだった。

指揮官こそ取り逃がしたものの、青年の知り得ているウェンデスの残軍はほとんど残っていない。

あと一回勝てばさすがにウェンデス軍も撤退せざる得ないだろう。

赤鳥の英雄と呼ばれるこの青年、クラブは完全勝利を目前にしながら言い知れぬ嫌な予感がぬぐえなかったのである。

「……………」

ドカーーーーーッ！！

「な！！？」

爆弾が破裂した際の爆音。
揺れる景色。

ドカーーーーーッ！！

ドカーーーーーッ！！

ドカーーーーーッ！！

最初の爆音を皮切りに次々と破碎音が鳴り響き、その震動で景色が揺れる。

「砲撃？ いや、この破碎音は、爆弾？ っく、どっちにしても敵襲か！！」

いったいどの部隊が。

ポシューマスに攻め込んできたウェンデス三軍のうち、機甲軍、空軍は壊滅的な被害を与えた。陸軍が若干余力があるにしても自らの本営を護るので精一杯のはず。どこにこの前線基地を攻撃する余力のある軍が残っている？

「クラブ殿！ 北西の方角にて敵軍による砲撃です！ 軍旗は青い蝶と獅子！ ウェンデス海軍です！」

ポシューマス軍の士官がそう報告にやって来る。

「か、海軍……。てことはリーズ兄か！」

嫌な予感が完全に的中した。

今、リーズ兄を破るだけの策なんかすぐには思い付かない。それにリーズ兄が即攻勢に出るときは必勝の策があるとき。くそ、ポシューマスは内陸だから海軍のリーズ兄がここまで出張ってくることはないとタ力をくくってしまった俺の失策。

「クラブ殿！ 敵の砲撃により北の城壁崩壊！ ただの砲ではあり
ません！！」

「北っていつちばん硬いトコだよな。 やってくれる。 籠城は無意味って知らしめる砲撃……か」

ズ
コ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ン
！
！

「考えてる暇はない。守兵半分残して出陣だ！ 攻撃目標、砲撃を行つてゐる部隊！ 海軍は陸戦部隊はそんなにいないはずだ、敵は少数と見込まれる！」

初手目、二手目と、意表を突かれた俺の負け。

「ただ、陸戦の経験はリーズ兄より俺の方が上のはず。」

海戦部隊に陸上で陸戦部隊が負ける確率は極めて零。

陸戦部隊は陸で戦うことを想定した軍であつて、陸で戦うことを知らない開戦部隊に負けるわけにはいかない。

「ピイ、カイ、モモ、行くぞ！」

銀蝶部隊……。

「爆矢、徹底的に撃ちまくれ。もっともっと撃て撃て……！」

「もう北の城壁は完全に崩壊してますが、まだ撃つんで？」

「俺らの目的は城塞の破壊じゃねえ。クラブを城塞から引きずり出すことだ。そのために徹底的に爆矢で挑発たあ、豪勢なことてあいかわらずやな性格してるよ、あの提督さん」

「城塞の正面門が、開門しています。我が部隊に向かって迎撃部隊が出陣する模様です」

「迎撃部隊は無視だ、無視。作戦通りに城塞だけを狙い続ける」

「御意！」

城塞門が開門し、騎馬兵が銀蝶隊めがけて突貫してくる。

「兄弟揃って神速は兵を尊ぶか。あんなんと衝突しちゃ、俺らの隊は一瞬で瓦解だな。けどな、クラブ……、それ、兄貴に読まれているぜ？」

「火炎槍、発射準備！ 時間がない、発射可能なやつから撃て……！」

「じつと

騎馬隊が進行する前面に炎が広がる。

伏兵として伏せていた金套部隊が、火炎槍で馬の進路上に炎を吐き出していた。

先頭を走っていた騎馬は馬の勢いを止めれずに、炎に突っ込み炎にまかれていく。後続の騎馬は炎に突っ込む前に歩みを止めるも騎馬部隊の武器、機動力は完全に封じられていた。

「銀蝶隊、抜剣！！ かけええええええええ！！」

「金套隊、抜剣！！ かけええええええええ！！」

爆矢、火炎槍を放り投げ、刀を抜き、歩みの止まった騎馬隊に襲いかかる。

騎兵はそれでも馬上であるいは降馬して対抗しようとするが、

「歩兵戦で騎兵ふぜいが侍にかなうものかよ！！」

銀蝶の言う通り。

騎兵最大の武器は機動力であり白兵戦にあらず。

白兵戦では竜をも両断すると言われる刀を装備する侍に機動力を失った騎兵が勝てる道理はない。

決着はあつというまについた。

「金、赤鳥だ！」

「そりやおっかない。 神獣は提督に任せますか」

「逃がさないですよ！」

侍兵の前に立ちふさがるピィと呼ばれた少女。

「よく見たら金套さんと銀蝶さんじゃないですか。　なんでウエンデスにいるんですか？」

「まあ、こっちの提督の方がつきあい長いからかね」

「じゃあ、パパの敵になると言うわけですね。　なら容赦はしないです……って!!」

　　ピイの回りに舞い散る銀色の紙吹雪。

「こ、これはパパのマジックチャフ……」

「いや、クラブにマジックチャフの精製法を教えたのはこのボクでね。　正確にはボクのマジックチャフさ」

　　マジックチャフ。

　　全ての魔法物質を無効にしてしまう魔法主体戦闘職を完全に無力化する物質。

「魔法がダメなら私が相手をします。　　ピイさん下がってください」

　　モモと呼ばれた少女が剣を振りかざし、リーズに肉薄する。

「剣の精霊か」

「ダメだ、モモ!!　　逃げろ!!!」

「え……?」

彼女のマスターの鬼気迫る声を聞いた瞬間、モモの意識は虚空にとんだ。

「おっかないな、クラブ。 神獣の娘二人に、全てを断つ剣の精霊に守護されているのか」

「リーズ兄……」

「安心しろ、峰打ちだ。 剣の精霊とはいえ年端もいかぬ姿をした子供は斬らないよ」

リーズは刀を鞘に納める。

「大勢は決した。 無駄な抵抗はやめて武器を捨てて……逃げろ」

「逃げろ？」

「ボクが今欲しいのはお前の命じゃない。 赤鳥の英雄に圧勝した事実だけだよ」

敵として俺の目の前にいるこの兄は何を言っているんだろう。

「この三人は捕虜として頂いていくけどね」

リーズ兄はピイト、いつのまにかカイ、そして気絶しているモモを捕まえている。

「三人を離せ！！」

「クラブ、マジックチャフがそう簡単に精製できないことくらい知

ってるよね。 唯一この赤鳥とこの帝竜を抑えられるのはマジックチャフのみ。 マジックチャフを持ってないボクの同胞に神獣に敵う術はないからね。 これ以上この子達は戦わせられない。 剣の精の子にしたって剣技はそこまで驚異じゃないにしてもこの子のもつ剣もおっかなくて放置できない」

リーズはテレポートルングを取り出す。

「金套、銀蝶。 じゃ、あとは頼んだ」

「ハイハイ、了解」

「ちゃんと働きますからご安心を」

「クラブ、悪いことは言わない。 友達共々この戦いから降りろ。 次は容赦できない」

そういつて、リーズはテレポートルングを発動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0780p/>

提督立志伝 真・第一章 ～西方動乱編～

2010年11月27日18時20分発行